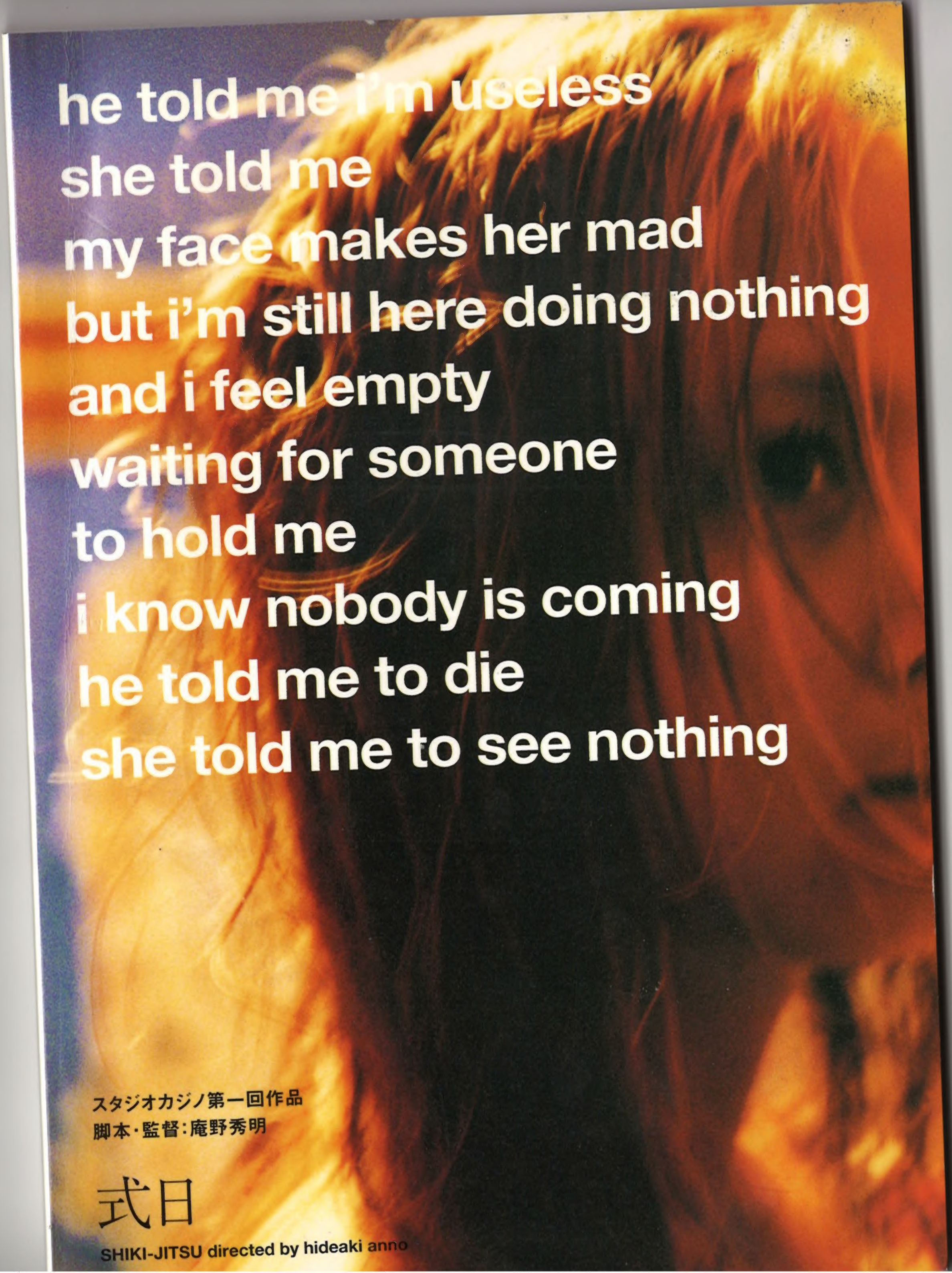

he told me i'm useless
she told me
my face makes her mad
but i'm still here doing nothing
and i feel empty
waiting for someone
to hold me
i know nobody is coming
he told me to die
she told me to see nothing
スタジオカジノ第一回作品
脚本・監督：庵野秀明
式日
SHIKI-JITSU directed by hideaki anno

01

the 1st day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

30days remain

words

「ね、明日、何の日かわかる？」
「いや」
「明日は、私の、誕生日なの！」

02

the 2nd day

29days remain

words

「昨日は、タバコありがと。それと、これ……、誕生日おめでとう」
「違う。明日が私の誕生日なの」

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

03

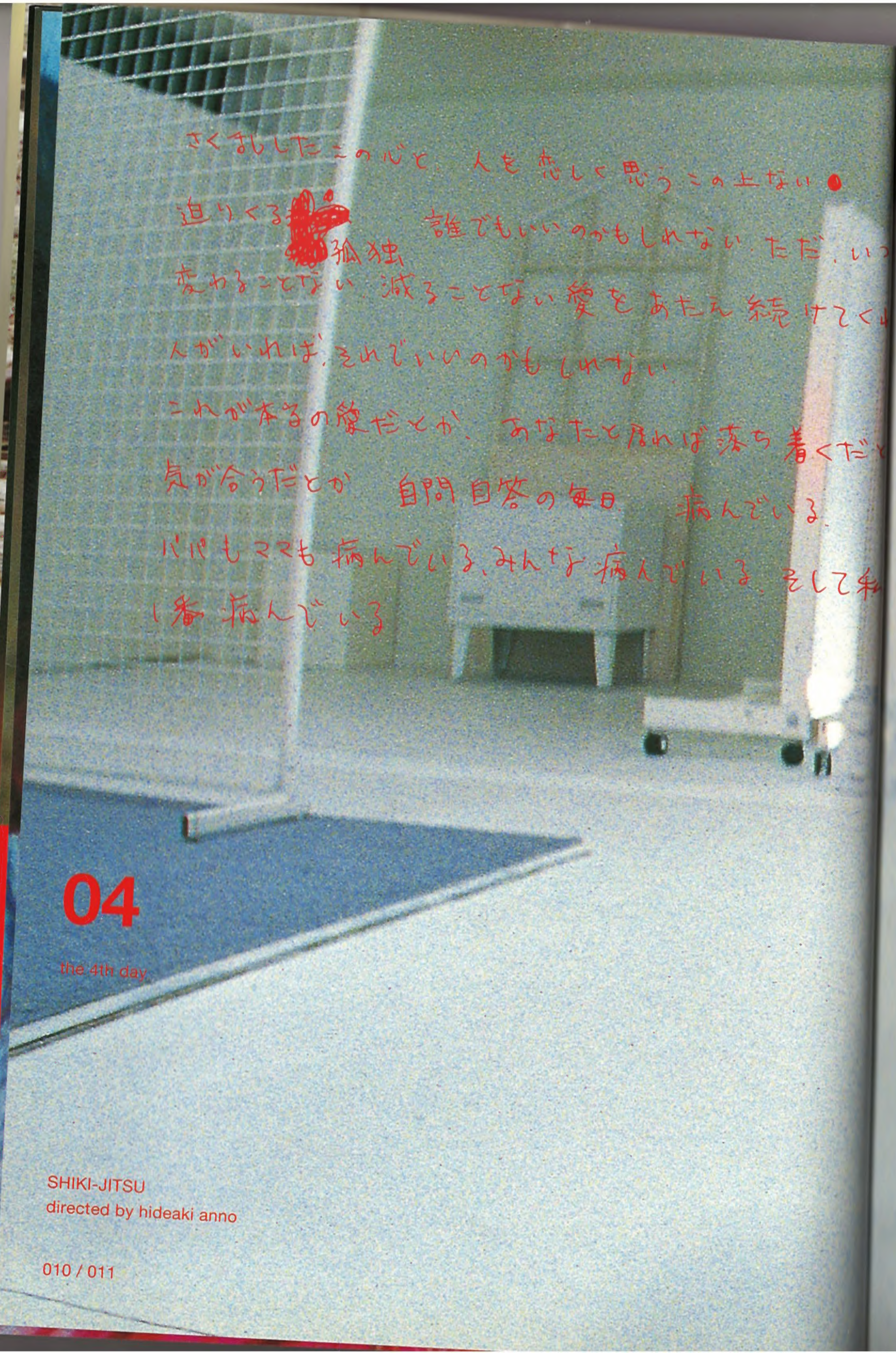
the 3rd day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

28days remain

words

ただ彼女を『捜す』という行為。それで十分だった。その時の私は、仕事や自分自身に対する行き詰まり、無気力と焦躁が生み出す、日常的な退屈に馴れ親しもうと努めていたからだ。個人の生活という現実を避け続け、虚構の構築に綴られた自分の人生にただただ、疲れ果てていたからだ。



04

the 4th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

27days remain

05

the 5th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

26days remain

words

恐らく、彼女にとって真実は自分を傷つけるだけの敵なのだ。出口を失った闇のような孤独がこの娘の日常のすべてなのだ。彼女の持つ淋しさや不安を少しでも和らげたいと思った。例えそれが自らの過去に対する贖罪であろうとも。

06

the 6th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

25days remain

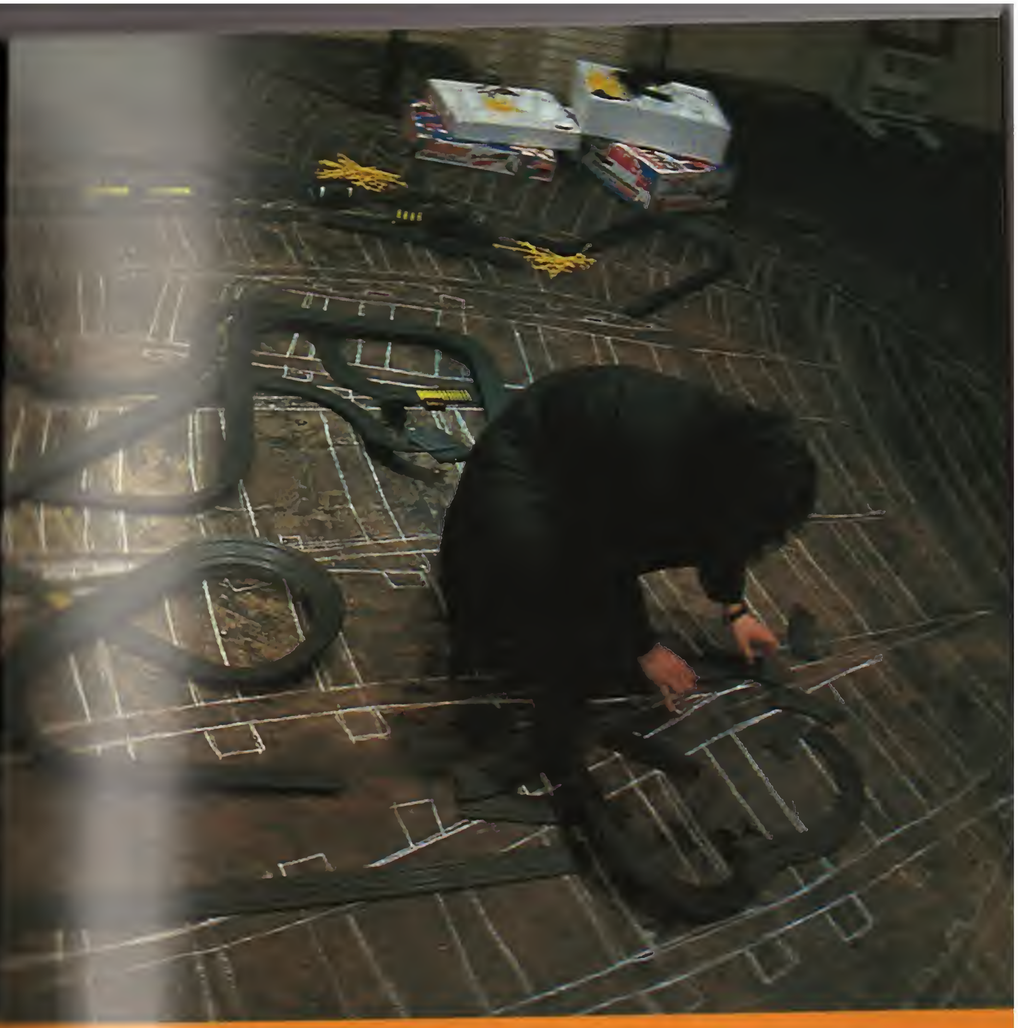
words

空がキレイ。星がキレイ。月がキレイ。光がキレイ。私が存在しなければ、みんなキレイ。私がいないほうがいいのかな。私の血はどうだろうか。それぐらいはキレイかな。見てみようかな。

07

the 7th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno



24days remain

words

「何やってるの？」
「うん？　何にも……本来の仕事はさ、疲れるから。今は遠ざかってるって感じかな。本当はね、実写もやりたかったんだよ実写映画　映画」
「映画？　えへへ、映画……やればいいじゃん。やんないの？　やればいいじゃん。じゃさ、今から『カントク』ね。『カントク』って呼ぶから……『カントク』」
「やめてくれよ」

08

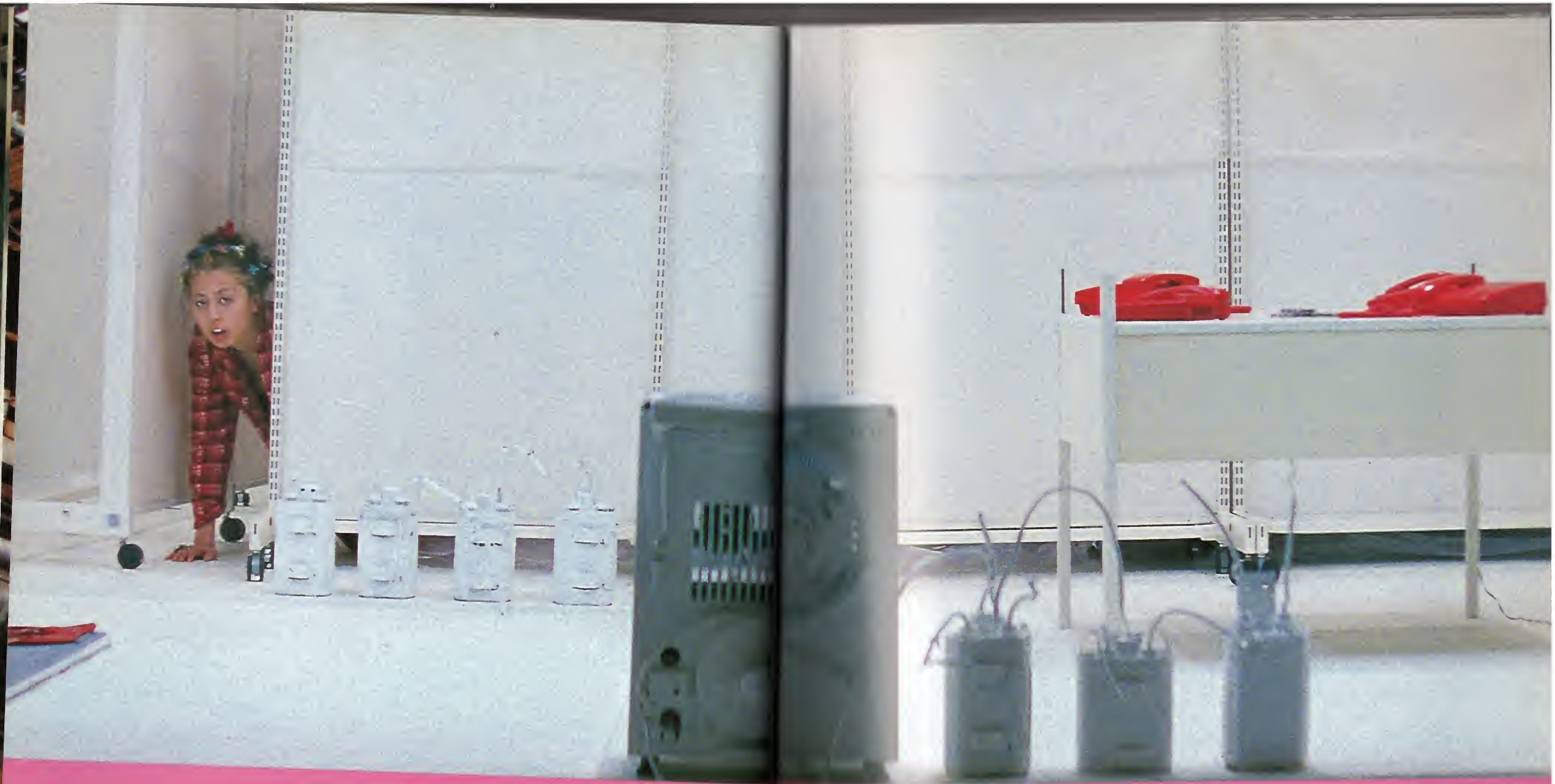
the 8th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

23days remain

words

だからこそ、彼女を撮りたい、と思った。映像、特にアニメーションは、個人や集団の妄想の具現化、情報の操作選別、虚構の構築で綴られている。存在をフレームで切り取る実写映像すら、現実を伴わない。いや、すでに現実が虚構に取り込まれ、価値を失っている。久しく云われる現実と虚構の逆転。すでに私にはどうでもいいことだ。私の意識、私の現実、私の被写体は、彼女に集約されつつある。恐らくは、妄想から逃げ出したい私。この相反する事象を、映像として切り取っておきたかったのだ。だがその行為もしょせんは映像を通してしか他人とコミュニケーションがとれない自分の言い訳に過ぎない。



09

the 9th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

22days remain

words

「寝るのがこわいの。寝る瞬間、目をつぶると何か重たいものが降りてきて、頭をつぶそうとしてるの。よけてもよけてもよけてもよけても、落ちてくるの。目をそらすことができなくて。だから寝ないの。気を失うの」

10

the 10th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

21days remain

words

その夜、降り出した雨とともに、彼女の笑顔は消えてしまった。

11

the 11th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

20days remain

words

彼女の好きな雨。はれた日には覆い隠されていたものが、雨の日には堰を切ったように流れ出る。寂しさという感情。これらの思いは精神と裏腹に彼女を高揚させ、ある行為に至らないように作用している。そして、雨という事象に対する、彼女の様々な反応を生み出していた。彼女の背負った悲しみとは何か。恐らくは、血の繋がった家族の死。私はこの時、彼女が心の中で自らの存在の消滅を望んでいることを、改めて確信した。

19days remai

12

the 12th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

おいてきぼりされた。
[illegible]がかれてほっていかれた。
[illegible]してみたけど、こわくて、ふるえが止まんない。
ふられたサイコロの魔力はおとることなく
私をあやつる。
[illegible]に出会えてよかったという日がいつかくれば
いいのにと、鼻歌 歌う。

13

the 13th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

18days remain

words

何に脅え、何から逃げているのか、彼女は何も話さなかった。彼女には、もはや誰も見えていない。私は今、彼女の中に存在していないのか。一度も会話を交わすことなく、一度も目を合わすこともなく、この日は終わった。こんな姿の彼女を切り取る勇気が私にはなかったからだ。ゆとりのない耐え難い現実が、私の上にものしかかろうとしていた。

14

the 14th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

17days remain

words

「ほらほら、お母さんですよ、お母さん。私達の優しい優しい、お母さんですよ。ちゃんと挨拶しましょうね、ジャムちゃん。」

15

16

17

18

19

the 15/19th day

16days remain

15days remain

14days remain

13days remain

12days remain

words

彼女の儀式は未だ中断されたままだ。あの日以来ずっと、屋上にも昇らず、線路にも行かず、一日中ネコと戯れることで、心を回避させている様だ。相変わらず睡眠もとらず、この頃は食事もろくにとらずに、ネコとひたすら戯れ続けている。他に特記すべきことはない。ただ、私と会話は勿論、目を合わすこともなかった。未だ彼女の中に私は存在していないのだ。

20

the 20th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

11days remain

words

その日、ついに彼女は帰って来なかった。ふと私は、ネコがいなくなったことにほっとしている自分に気づいた。

21

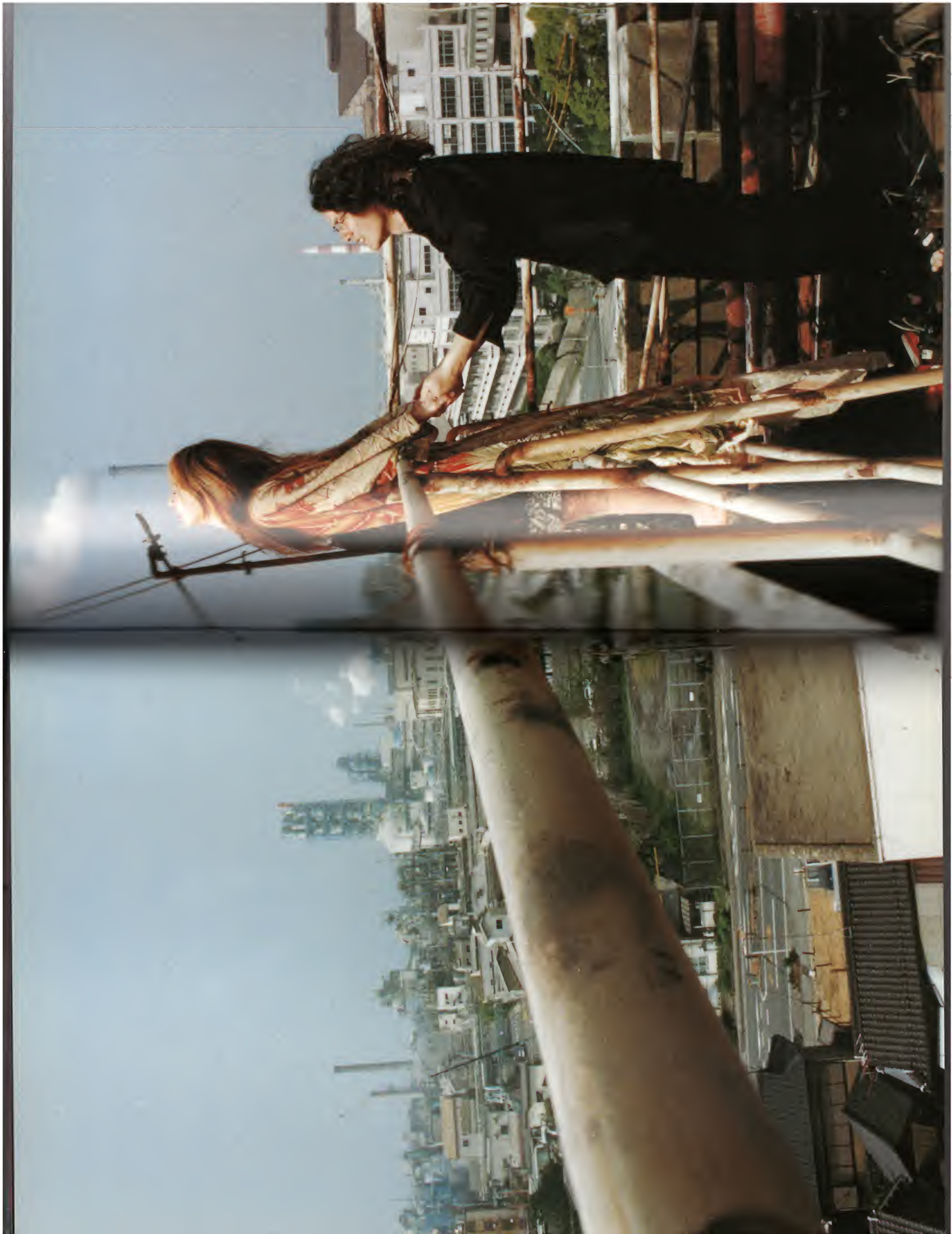
the 21th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

10days remain

words

「もう、どこにも行かないでね。もう、この間みたいに、いなくならないでね。もう、私を一人にしたりしないでね。約束だよ。だって明日は私の、誕生日なんだから」
「ああ……わかったよ」
「誕生日は、絶対、側にいてね。ずっと、ずっと、いてね」
「……」



22

the 22th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

9days remain

words

「私ね、寝るのが怖くなったの。カントクが横にいてくれただけでね、うん、で、なんか、すっごい当たり前の様に瞼がつぶれたの。で、何か、何にも怖くなくって、何にも落ちてこなかったの。何かね、逆に身体がすっごく軽くなって普通に眠れたの。すっごいことなのよこれ！すっごいことなんだよ。分かる？すっごい大発見なの、これは。すっごい大発見！なんだよ」

23

8days remain

24

7days remain

25

6days remain

26

5days remain

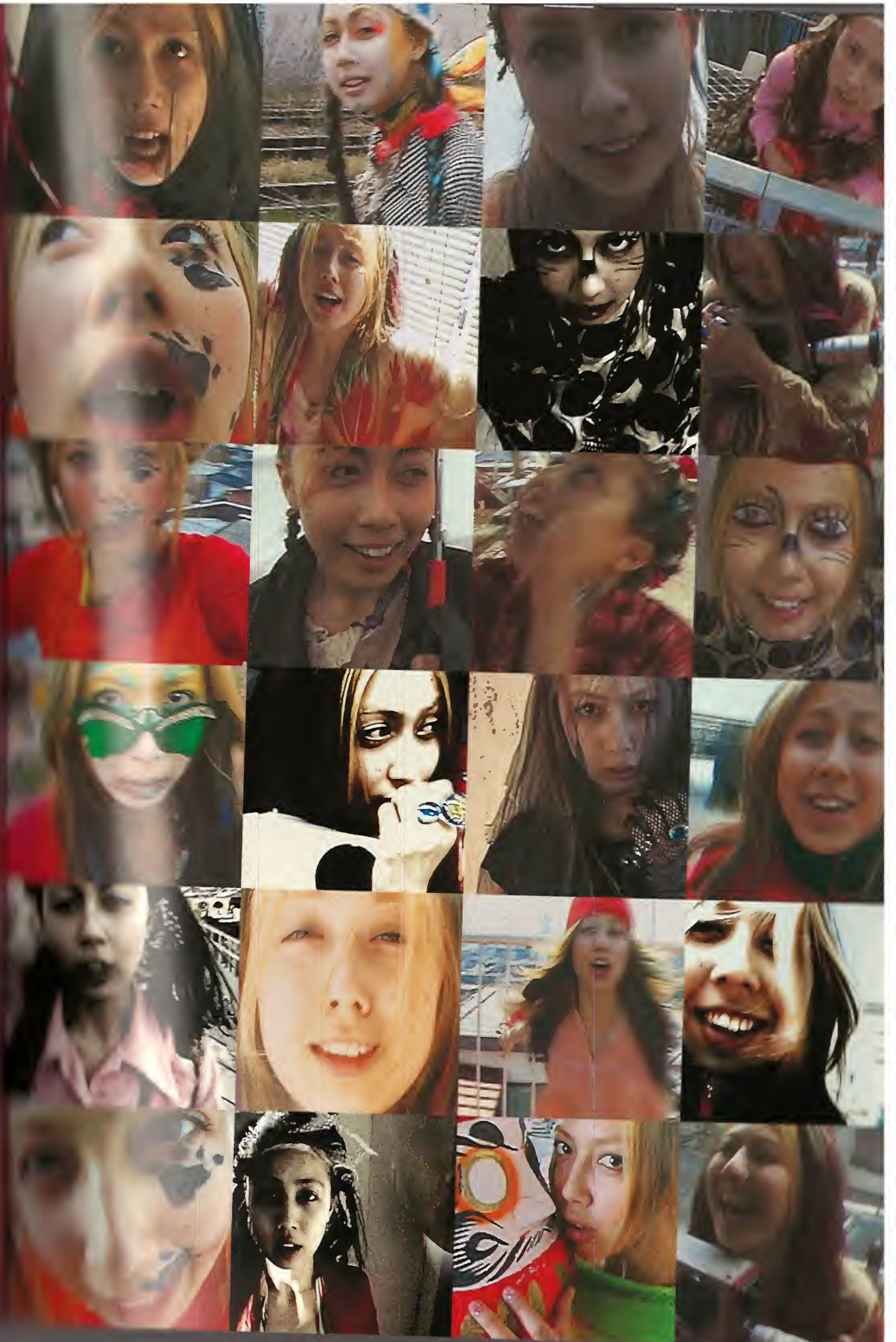
27

4days remain

the 23/27th day

words

明日は私の誕生日なの！



28

the 28th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

3days remain

words

無慈悲と残酷と憎しみと孤独に満ち満ちた世界が彼女の心を覆っている。それはこの世界の現実だ。誰もがその不条理を恐れ、嘆いている。だが、世界はとてつもなく広大で、ヒトの心にはまた優しさと慈しみと触れ合いも存在している。その事実を彼女にも知って欲しいと私は切に願った。

29

the 29th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

2days remain

words

心臓の動いていない魚が泳ぐ
真っ青な夜空を見上げ
彼女は涙するのです

人々や神々が
さげすんでいるのか
なげいているのか
何にもわからず
涙するのです

カラカラの笑顔を浮かべ
新しい血とヌルヌルの血をしたがえ
彼女は涙するのです

謝る声は届かない
だからペコリペコリと頭を動かし
彼女は涙するのです

30

the 30th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

the day before

words

彼女はついに彼女であることも拒絶してしまった。

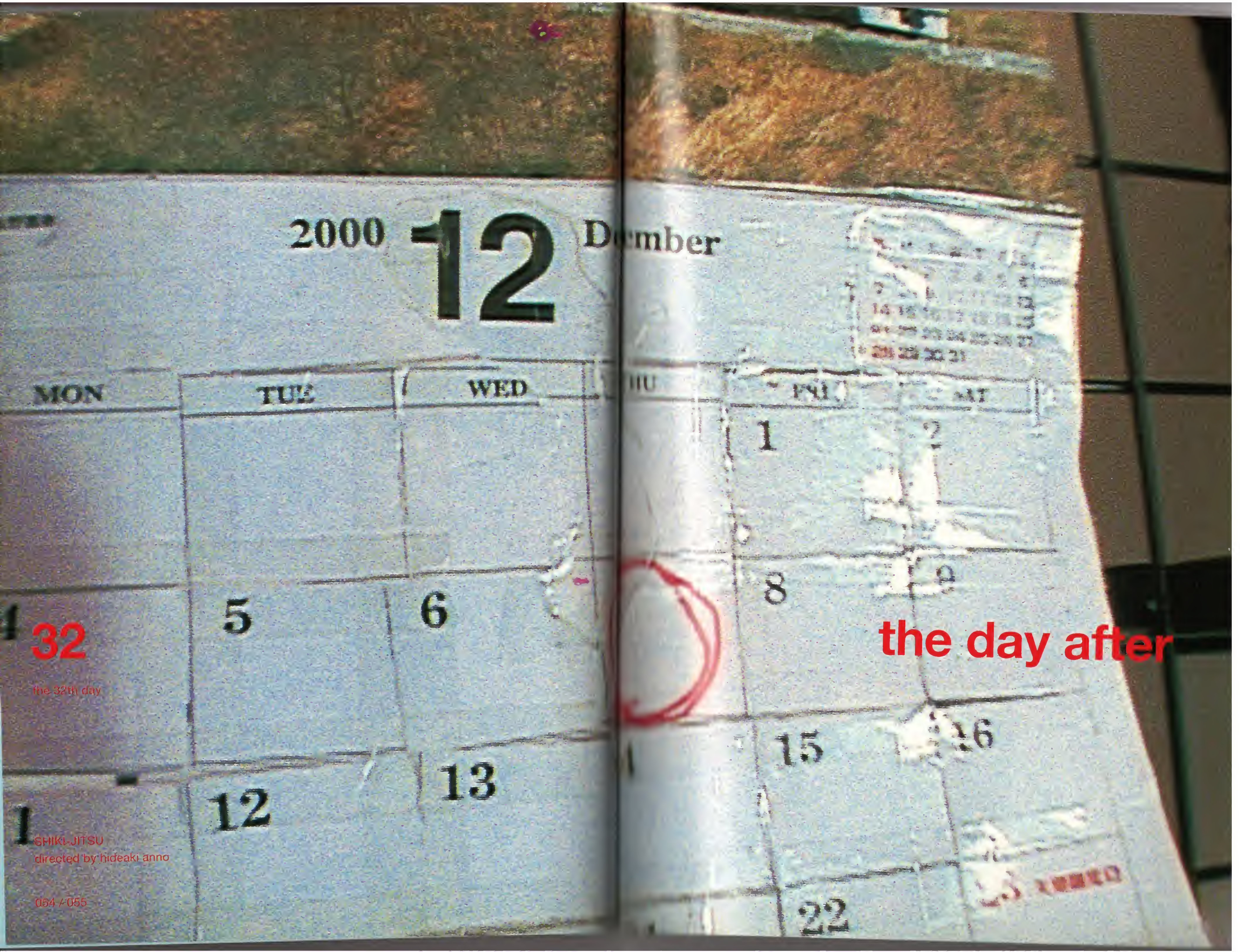
31

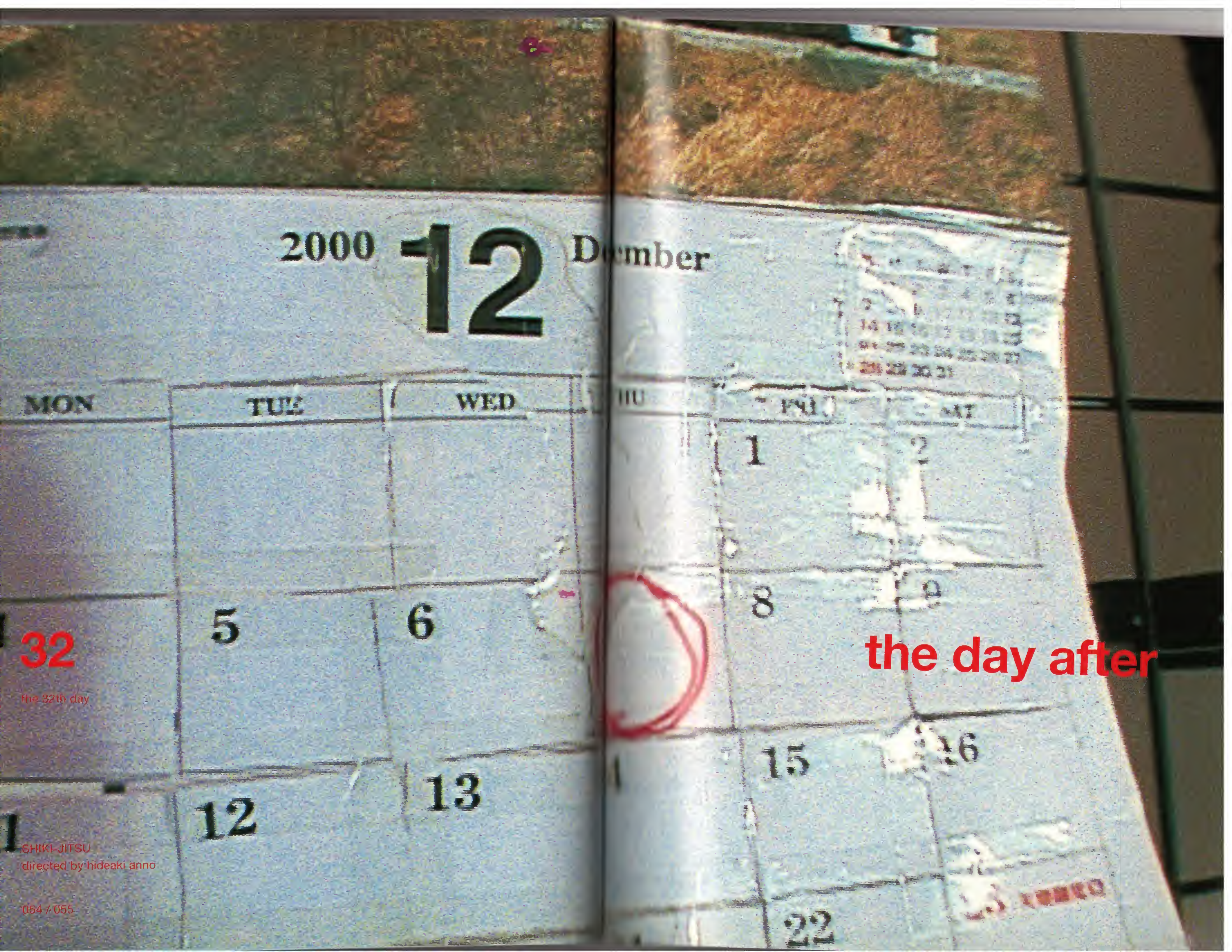
the 31th day

the day

words

「元気だったの?」
「……」
「元気だったの?」
「……」


32
the 32th day
SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno
054 / 055
the day after



the day after

32

the 32th day

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

出演

[illegible]・カントク　岩井俊二

[illegible]　藤谷文子

[illegible]の男　大崎章
[illegible]児童　鵜ノ島小学校の子供達
新川小学校の子供達

[illegible]のアナウンス　西野鮫美子
[illegible]話の女　山崎さやか
[illegible]のおばさん　岸田里子
[illegible]　山崎耕嗣
[illegible]とその家族　岸田裕之
宮崎慶一郎
宮崎訓子
宮崎智大
宮崎惇
山崎久美
山崎明日香
山崎亮
山崎勇
佐村勇治
佐村直子
佐村郁佳
西村創一郎
藤田晶之
水津賢治
古谷博
末永寛
山本哲也
木原大介
宮地恵美

[illegible]　林原めぐみ
[illegible]　松尾スズキ

[illegible]　村上淳

[illegible]　大竹しのぶ

[illegible]

[illegible]　徳間康快

[illegible]　鈴木敏夫

[illegible]　藤谷文子"逃避夢"

[illegible]　庵野秀明

[illegible]　加古隆

[illegible]　長田勇市(J.S.C.)
[illegible]　長田達也
[illegible]　橋本泰夫　清水和法
[illegible]　林田裕至
[illegible]　上野聡一
[illegible]　石山久美子
[illegible]　岩井俊二
[illegible]　伊藤佐智子
[illegible]　柘植伊佐夫
[illegible]　大崎章
[illegible]　山本章

[illegible]　[illegible]雅二郎

音楽録音　田中信一
音楽制作　稲城和実
音楽業務　長井孝　渡辺宏行
録音スタジオ　コンシピオ・スタジオ

エンディング・テーマ　"Raining"
作詞：こっこ
作曲：こっこ
編曲：根岸孝旨
歌：Cocco
(ビクター・スピードスター
レコード)

劇中歌　"ラジオ体操の歌"
作詞：藤浦洸
作曲：藤山一郎
(楽曲協力：
日本コロムビア)

"トウヒム"
作詞：藤谷文子
作曲：川井憲次
編曲：川井憲次

演出助手　谷口正晃　吉田亮
方言指導　日比梨恵子　末永寛
撮影　大沢桂子
撮影助手　鍋早智　中島美緒
西尾朱音

STEADICAM OP　飯村和弘　永森芳伸
柳下誠治

照明助手　鈴木康介　蒔苗友一郎
田中利夫　中島展貴
岩切弘治

録音助手　藤丸和徳　永井亀生
上家寿志　竹内久史

美術助手　平井敦郎　安宅紀史
組付き大道具　高木智之
装飾　石田登
装飾助手　田口貴久
小道具　浅井智子
特殊造型　中洲プロ
特機　佐藤信一　石綿宏幸
スタイリスト　衣笠夕子(ブリュッケ)
兼子潤子

ヘア・メイク　外丸愛
メイク　浅野裕司
(shu uemura atelier)

ヘアエクステンション　実山幸恵(nerds)
編集助手　森下博昭
ネカ編集　三陽編集室
音響効果　伊藤進一　林彦佑
調音エンジニア　多良政司
調音エンジニア助手　野村みき　竹島直登
ProTools OP　坂上賢治
タイミング　飯野浩
キーコードテレシネ　星野啓介
オプチカル　長池直美
EBRエンジニア　渡邊愛
タイトル　竹内秀樹
海外プロモート　STEPHEN ALPERT
森吉治予　武田美樹子

宣伝　室井實　西岡純一
制作主任　傳野貴之
制作進行　安田邦弘　伊藤敏子
車輌　木村利明　武富孝志
市川憲人　中西論史

特撮　株式会社特撮研究所
特殊技術　尾上克郎

撮影　中根伸也　[illegible]
鈴木敬[illegible]
照明　安藤和也　[illegible]
森真梨子
操演　鈴木昶　中山亨
美術　松浦芳　[illegible]

Visual Effects　OMNIBUS JAPAN
VFX Supervisor　石井教雄
Domino Compositor　高橋尚[illegible]　[illegible]
Infinity Compositor　川村誠也　[illegible]
Film Scanning and
Recording　丹野[illegible]
Visual Director　堀内[illegible]
2D Painter　金海[illegible]
Animator　小倉[illegible]　[illegible]
[illegible]

Technical Support　松尾康博　[illegible]
[illegible]

CGI Producer　桑田[illegible]
1st. Video Engineer　山口[illegible]
2nd. Video Engineer　松浦[illegible]
3rd. Video Engineer　関口明

技術協力　[illegible]
[illegible]
[illegible]

協力　山口県[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
GAINAX

[illegible]

[illegible]

プロデューサー　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]

『言葉』

脚本・監督　庵野秀明

「彼女の闇を見ましたよ」と、友人の樋口真嗣が酒の席で叫んでいた。「庵野さんも読んでみて下さいよ」と、後日ファイルに入ったノートを持ってきた。原作となる藤谷文子のその文章を読んだとき、「確かに」と、私もそう思った。彼女の抱える各種の葛藤が、拙さが味になっている変な文章で描かれていた。書いている時の気分がそのまま残っている生の手書きの良さも相まって、面白く読めた。

これを映像にしてみたかった。その奇妙な感覚を、フィルムに定着してみたかったからである。

そして、藤谷文子という女優を彼女自身の原作で撮ってみたかった。単純で複雑で繊細な今の彼女自身を、フィルムに定着してみたかったからである。

だがしかし、原作をそのまま映像に置き換える力は私にはなかった。原作を解体し、核となる部分を取り出し、再構築するしか出来なかった。男の職業は、会議において最終的に「監督」となった。私自身に一番近いという理由である。

再構築の際、妄想と人格の細分化による現実対処を彼女の軸とした。それは、明日というものを、ちょっと考えてみた時、今日と同じという答えが出た。今日というものを、ちょっと考えてみた時、昨日と同じという答えが出た。リセットとリピートによる、変わらない閉塞の日々。そのやるせない気分を、フィルムに定着してみたかったからである。

昨年、友人がまた一人死んだ。ようやく身を固め、子供が生まれたばかりの矢先である。

これほど生きたいと願ったヤツはいないのではないかと思う。生まれた子供の顔が見られたのが、せめてもの救いだと思いたい。

その彼と、今生の別れをした。生きて会えるのはこれが最後と覚悟をした事は、初めてだった。

別れ際、彼は「がんばれ」と最後の言葉をくれた。私は「がんばる」と言葉を返した。

彼との約束を守る。

そのためにも、故郷で、山口県宇部市で撮影をしたかった。今の自分自身を少しでも、フィルムに定着してみたかったからである。

映像としての方法論は、その主力を35ミリシネマスコープにしたかった。映像は、ただ美しく、そこに在るモノをフィルムに切り取りたかったからである。

演出としての方法論は、その最終的な着地点を台本上では定めず、役者の気持ちと現場の流れに委ね、決定したかった。

ただ舞台に立つ人物とその関係性のみで成り立つ演劇が持つ時空間を超えた感覚を、出来れば、フィルムに定着してみたかったからである。

やはり、自分の作品について語る「言葉」は、あまり持てません。今、自分から搾り出せる「言葉」はこのくらいです。すみません。

最後に改めて、このシャシンのスタッフ及びキャスト、そして宇部の方々に感謝いたします。

ありがとうございました。

プロフィール

1960年5月22日、山口県宇部市生まれ。大阪芸術大学在学中に、仲間と数々の実写、アニメーション作品を自主製作し、注目される。その後、プロのアニメーターとして、宮崎駿監督の『風の谷のナウシカ』('84)『超時空要塞マクロス』('84・石黒昇・河森正治監督)、高畑勲監督の『火垂るの墓』('88)等に参加。また大阪時代の仲間が集まり、そのクオリティの高さが話題となった『王立宇宙軍・オネアミスの翼』('87)の作画監督も担当する。そして、オリジナルビデオ作品『トップをねらえ!』('88)、TVアニメ『ふしぎの海のナディア』('90)の監督を経て、空前の大ヒットTVアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』('95)を世に送り出す。その後、村上龍の原作を映画化した『ラブ&ポップ』('98)で実写映画を初監督、小型軽量であるデジタルビデオの特性を生かした斬新な映像が話題となる。'98年に少女コミックスを原作にした『彼氏彼女の事情』を監督する。'99年にドキュメンタリービデオ『GAMERA1999』の総監督も務める。

プロダクション・ノート

●「式日」は、徳間書店が設立した新ブランド「スタジオカジノ」の第1回作品である。「カジノ」とは、徳間書店のアニメ制作部門である「スタジオジブリ」のある梶野町に由来している。

●画面サイズは「シネスコサイズ」（縦横の比率が1:2.35）が選択された。現在の日本映画はテレビ放映やビデオ発売を意識して、ビスタサイズ（縦横の比率が1:1.85）で制作されることが多いが、庵野監督やスタッフの映画の原体験がシネスコだったため、映画といえばシネスコというイメージにこだわった。

●映画の舞台は、庵野監督からの提案で、監督の出身地である山口県宇部市が選ばれたが、宇部市は典型的な地方工業都市であり、つまりは日本における最大公約数的な都市と言えるため、見る者に既視感を与える効果になると考えられた。工業プラントが無機的な美しさを醸し出し、主人公たちの孤独感をより一層あおっている。

●「式日」には、「彼女」が抱く妄想の映像に限定して、HDCAM/24P撮影とCGによるスペシャルエフェクトが使用されている。観客がこの場面は妄想なのだと認識し易いように、妄想の映像化にはある記号が当てはめられた。藤谷文子本人が描いたアナログな絵にデジタルアニメ的な効果を加えたことも、そのひとつだ。

●本編中で主人公がビデオカメラ（DV-CAM）で撮影したという設定の映像は、カントク役を務め、自身も映画監督である岩井俊二によって、実際に撮影されている。

●撮影は、2000年4月1日にクランクインされ、4月30日にクランクアップしているが、撮影準備としてプリプロダクションが2月1日から3月31日までとられ、撮影後、5月1日から6月30日まで、編集やスペシャルエフェクトなどのポストプロダクションがとられ、7月7日に初号プリントが完成している。

宇部市プロフィール

映画の舞台となった宇部市は、山口県の南西に位置し、周防灘をのぞむ工業都市で、気候は温暖で雨の少ない典型的な瀬戸内海気候、人口は県下2位の17万5000人。明治以降の石炭産業の振興を通じて築かれたが、資源エネルギーの需要構造の転換に伴い、化学工業を中心とする近代的な臨海工業都市へと生まれ変わっている。宇部市の自治精神の高揚と街づくりへの情熱は高く、都市緑化や公園整備など、様々な分野に幅広い展開を見せている。特に彫刻による街づくりに関しては、国内有数の歴史と権威を誇る「現代日本彫刻展」の開催をはじめ、市内随所に数多くの作品が設置され、宇部市固有の情景となっている。

いろんな意味で挑戦であり戦いでした

藤谷文子インタビュー

——最初に庵野さんのシナリオを読まれた感想は?

(シナリオは)原作と違うと言えば違うのですが、基本にあるものや、登場人物はいっしょです。私の原作は、あくまで文章での世界観を重視して構築していますから、それをそのまま映像にもっていっても無理だというのは、もとからありました。また、庵野監督がその原作を映画化してくださるという時点で、映像での世界観で面白いものにしてくれるという信頼感と期待があったんです。だから、脚本があがってきたとき、不安や違和感はまったくありませんでした。

——キャスティングについては?

岩井さんをカントク役にという話を聞いたときに、他にはいないと思うくらい自分の中のイメージにぴったりだったんです。

——岩井さんの最初の印象は?

岩井さんの持つ雰囲気はやわらかくてイメージ通りだったんですが、私が緊張しちゃって、ほとんど顔もあわせられなかったんです。岩井さんは怖い人とか、優しい人とか噂をたくさん聞いていたので、岩井さんと並んで写真を撮るときに「岩井さんはすぐ怒りますか?」って聞いたら「いやっ、別に。すぐ怒るの?」って、逆に聞きかえされちゃいました。そんな初対面でしたね。

——岩井さんは、大竹さんとのシーンでは、藤谷さんにテレパシーを送っていたとのことですが。

テレパシーを? あたしに? 何か嬉しいです。確かに感じました。というか大竹さんとのシーンはすべてアドリブでリハーサルなしでしたから、あの時、あの空間にいる人間はそういうものを感じたんじゃないかと思います。

——藤谷さんの激しい演技に驚いたんですが、今回の演技プランは?

プランというよりは、原作と脚本の女の子のキャラクターは全然違っているので、まず、自分の中でリセットするということが、課題でした。

——お姉さんに変身した時の演技もよかったですね。

あの宇部弁がたいへんでしたよ。その日の朝になってセリフが増えていたので、岩井さんや方言指導の方が助けてくださって、カメラをセッティングしている間に覚えていました。たばこを吸うシーンでは、普段は吸わないので前の晩に練習しました。

——宇部の印象は?

まず、食べ物がおいしかったですね。それからロケ先でみんなが、やさしくしてくれました。あと、あれだけ立ち並んでる工場に隣接して、すぐ民家があるとか、工場がいっぱいあるから無機質なのかと思うと魚介類がおいしかったりとか、日差しが強いのに寒いとか、いろんなアンバランスなものが重なって、不思議な魅力を発散している街だなあと思いました。

——後半から登場する村上淳さんはいかがでしたか?

感謝しています。村上さんのあの新鮮なエネルギーは気持ちよかったです。台本に「以下アドリブ」って書いてある場面も多くて、1ヶ月間ずっと現場にいる私よりも映像とかを頭に浮かばせにくいかもしれないのに。私の中の自転車の男のイメージにぴったりでした。

——大竹しのぶさんとは初めての共演ですよね。

撮影前日は、かなり緊張して、不安を隠せないでいました。それで、庵野さんたちと一緒に大竹さんに会いに行って話をしたら、大竹さんも話を聞こうとしてくれまして、ありがたいなって思いました。大竹さんとのシーンはこの映画でも大切なシーンでしたし、まるごと「以下アドリブ」ではなく、「未定」でしたから、もうやるしかない!! という感じでした。それが、私でも何とかなったのは、大竹さんがお母さん役だったからなんです。あと、大竹さんからいただいたチョコレート、おいしかったです。

——セリフが自然なので、全般的にアドリブなのかと思いましたが、ほとんどシナリオ通りなんですね。

ええ。特にアドリブと思われがちな、お母さんの留守番電話に大阪弁でしゃべるシーンも、ちゃんと監督の指示でしたし。設定で彼女は大阪に住んでいたことになっているんですよ。

——映画が完成していかがですか。

何か今回はいろんな意味で挑戦でしたし、戦いでもあったというか。原作を映画化してもらえること自体ですごくうれしかったし、いろいろやらせてもらって、役者冥利に尽きるといいますか(笑)。できているかどうかは、もう、自分ではよく分からない部分が多いですが、とにもかくにも映画が完成してよかったです。

俳優経験を
今後の現場に生かします

岩井俊二インタビュー

——どういう経緯で出演することになったのですか。

最初、プロデューサーの南里（幸）さんからこういう映画があるので、話がしたいということだったんです。そこで、俳優として出演してほしいと言われたんですが、僕もこれまで俳優じゃない人を起用したりしていたので、全然違和感はなくて。最初は、庵野さんがやるイメージだったらしく、プロの俳優というよりは、監督経験のある人でやりたいんだということでしたので、台本を見させてもらいますということになったんです。

——台本を見ていかがでしたか。

内容の良し悪しではなく、どのくらい自分が出るのかのチェックでしたので、それほど台詞が多くないことを確認して、OKしました。

——これまで、演技の経験は。

学生の頃、みんなで映画を作っているときは、やったりしていましたけど、そのレベルですね。それも、俳優をディレクションするときに、あまりにそこが音痴だとまずいかなと思ってやっていたので。

——岩井さんが演出をされるときは細かく演技指導をする方なんですか。

相手によりけりですね。その人にあっていればいい。新人のまったくそういう経験のない人だったりすると、そもそも演技ってさという話もしたりしますけど、こっちに経験がないと何にも教えられませんし。プロの人でも、こういったタイプの演技をしてほしいということがあります。でも、どうも、今までは、アマチュア演技評論家という感じでしたので、映画監督なのに、アマチュア演技評論家っていうのはどうもウソくさいなあというのがありまして。

——庵野さんからの演技指導というのはあったのでしょうか。

あまりそういうのはなくて。僕としてはなるべく邪魔しないようにと考えてました。監督って忙しいですよ。いろんな情報が入ってくるし、対処しなくちゃならないし。台詞をとちったりしないようにとか、変なテレが出ないようにしようとかっていう感じでしたね。カメラ前でテレたりされるとむちゃくちゃ腹立ちますから。俳優やってると思うとたんにプシューッとなってしぼんじゃいそうなので、自分がどう映ってるか考えないようにしてたんです。リハーサルで、俳優さんの立ち振る舞いに合わせて自分で本読みしているのに近い感じで。

——台詞を覚えるのは大変でしたか。

キャッチボールの会話なので、不思議と覚えられたんですよ。最初のうちは、頑張って前の晩に覚えたりしてたんですけど、だんだんだれてきて、移動中の車で覚えてました。1回に2行超えるといきなり難易度あがるんですけど、1行ずつだと、なんとかなる。相手の言うことにこう言ったらこう返すというような感じでやっていると、2ページくらいに台詞がわたっても気にならない。

——監督としての庵野さんはどうでしたか。

他の人の現場ってほとんど見たことないんですけど、どこの現場も照明の建て方とか、美術の組み方がそんなにちがうとは思っていなかった。でも、方法論とかやり方の違いというのはありましたね。何だこれはっていうのは、庵野さんの演出くらいでした。

——どのような演出だったのでしょうか。

庵野さんが投げかけてくるものが、意外で、そこが面白いところでした。一歩ひいた演出法で、テストをやらずにいきなりやってほしい言われました（注1）。究極は大竹さんとのところですね。

——台本に「未定」となっていたところですね。大竹しのぶさんとは初めてですか。

会うのは初めてでしたけど、庵野さんにフリーにやってくれと言われていて、どこまでフリーにやっていいのかが、事前に話し合えて、良かったかなと思います。僕は役的に台詞がほとんどなくて、アドリブでかまわなかったけど、文ちゃんと大竹さんは当事者で「さあ会話せい」というのも大変だなと。親子という設定のふたりにせめて共有する記憶のストックを持たせないと、具体的なところはなかなか出ないんじゃないかと思いましたけど。

——最終的には。

台詞はなくて、アドリブです。やってみて面白かったですけどね。

——原作者でもある藤谷さんとの共演はいかがでしたか。

現場には、原作者としてではなく女優さんとして参加してきていたので、女優・藤谷文子が目の前でパフォーマンスするのにつられて自分も手を出して演技してしまうような感じでした。

——宇部でのロケは1ヶ月近くなさったんですよね。

1ヶ月一緒にやってると、彼女のことも分かってくるし、大竹さんとのシーンでは、何か言えっていうテレパシーを送ったりしてましたね。俳優というより、藤谷文子についているスタッフのような感じでした。

——村上淳さんとは。

一緒にやったのは少ない時間だったんですけど、見るたびにイメージが違って、不思議なトーンの人ですね。ずっと文ちゃんと2人でやっていたので、大竹さんや村上さんが来ると、解放された感じでしたね。なんていうか迷路みたいな話なので。

——今回の撮影は「シネスコサイズ」だったんですよね。

僕はほとんど意識していませんでしたけど、庵野さんが絵作りや構図にこだわってやっているなあと思いました。シネスコって、構図と見るかそうでないかで違ってきますよね。奥行きをもって立体的に見ていくのも面白いし。あと、シネスコの方がパッといってパッととっても、映画的な絵になってあがってきてくれる感じがある。ビスタサイズだと、映画的な絵にするのが意外に難しいんですよ。

——ご自分で撮る時は、絵コンテを切るんですか。

描く時も描かない時もあります。自分の予習のために描いたりすることが多いかな。『式日』みたいな話だったら、僕もコンテは描かなかったと思う。自分で撮る時、あまり予習したり構築したりしない方なので、次に何撮るのか知らなかったりして、人に教えられてじゃあ撮るかなんて、わりといい加減なんですよ。

——意外ですね。

いきなり段取りやるときもあるけれど、その日のスケジュールも知らなかったりする。でも、俳優はそういうわけにいかない。台詞は覚えていかなきゃだめなんだって、今回分かって、大変な仕事だなと思いましたね。

——でも、移動中に台詞を覚えたりとか。すっかり俳優ですよね。

なんていうか、終わったら忘れたって感じなんですけど、やってるときは方法論がありましたね。今回の最大の収穫ってそれかもしれない。これまでは、俳優に何ページもある台詞を覚えてもらうのは大変だなっていうのがあったけど、「このくらいなら覚えられるだろう」という状況に変わった。1つの台詞が何ページにもなるのは難しいけど、相手がこう言ったらこっちもこう言うといってやると、一言一句出て来るんですよ。変にアレンジしない方がいい。まるごと暗記するのではなくて、自然に口をついて次から次へと出てくるメカニズムにしておくというか。連ドラとかに出ている俳優だとその場で台詞を変えても次々覚えていっちゃう。そこまでの領域にはとてもいかないけど。

——今後、別の作品で俳優として依頼があったらどうしますか。

いや、カントク役だからずっと入れたというだけで。別に次はこういう役をやりたいという欲があるわけではないから。むしろ貪欲に自分の現場に役立てたいというのはあります。僕は、わりと現場で助監督いらずと言われるくらい前に出て、直接スタッフと話をしてやる方なんです。なにかするときそれが誰の意志なのかをはっきりさせたいというのがあって。今まで、時間がある時には、照明や美術をさわったり、カメラ回してみたりしてたんですけど、俳優の領域って不透明だったんです。で、そこが見えてこないとプロの監督じゃないんじゃないかと思っていて。これで分かったわけではないけど、一歩進んだんじゃないかな。

——これからの演出に役立ちそうですか。

俳優っていうのが、現場に参加した時どんな時間軸を持っているのか分かってよかったですね。今までは、どう演出するかがこっちの仕事で、俳優は台本が頭に入ってるくらいで現場に来るんじゃないかと思っていたんです。人によっては「どうしたらいいですか」とか質問して来たり、プランを出してくれたけど、本当は、アグレッシブにそう言える人だけが、言って来てただけなんですね。質問してこない人も、一晩中考えたり、監督のいないところで、俳優同士で「この役ってさー」という話をしているんだと思ったら、そこを生かして、もっと頼っていいのかなと。その辺が余裕持てるようになりました。

（注1）「式日」の演出について、庵野監督自身が8月26日の「アニメージュTV」（テレビ神奈川・テレビ埼玉やCATV・CSで放映）でのインタビューで以下のように語っている。「演出を役者に対してしないというのが今回の演出方法のメインです。あまり、それをやるとアニメ的になるので嫌なんです。今回はアニメから離れたものをとつとめていたので。役者さんはやりにくかったと思います。ただ、立ち位置とかにはうるさかった。ここから、ここの間で芝居をしてくださいとか。それ以外は自由にやってもらっています」。

キャスト・プロフィール

男・カントク：岩井俊二（いわいしゅんじ）
1963年1月24日宮城県仙台市生まれ。ドラマやミュージックビデオ、CF等多方面の映像世界で活動を始め、その独特な映像は"岩井美学"と称され注目を浴びる。'93年にテレビドラマ『if もしも』の『打ち上げ花火、下から見るか？ 横から見るか?』で日本映画監督協会新人賞を受賞。その後、映画へ進出。短編『undo』『PiCNiC』を経て『Love Letter』を発表。3ヶ月のロングランを記録、数々の映画賞に輝く。さらに長篇第2作として、架空都市「円都（イェンタウン）」を舞台にした『スワロウテイル』を発表。'90年代を代表する映像と音楽との見事なコラボレーションを展開した。'98年にはフリーハンドで描いたスケッチの様な美しい映像『四月物語』を発表。現在は2001年公開予定の映画『リリイ・シュシュのすべて』を制作中。

彼女：藤谷文子（ふじたにあやこ）
1979年12月7日、大阪生まれ。13歳の時に出演したCM「リハウス娘」で注目を浴びる。その後、平成『ガメラ』シリーズなどの映画やTVドラマで活躍。'98年、勉学のために渡米。ハリウッドで出会ったスター達のレポートを雑誌「ロードショー」に掲載。'99年、帰国後に女優業を再開。エッセイストとしても「PeeWee」「映画秘宝」などの雑誌に寄稿、その才能が認められる。「逃避夢」が庵野秀明監督を触発し、本作の原作として採用される。

自転車の男：村上淳（むらかみじゅん）
1973年大阪府生まれ。1994年『ぷるぷる』で映画デビュー。『バウンスkoGALS』等をはじめ、映画を中心に活動。'99年以降『トランスミッション』『deadBEAT』『ナビィの恋』等をはじめ、役柄の大小を問わず、積極的に映画に参加。2000年には本作以外にも『不貞の季節』『SWEET SWEET GHOST』『新・仁義なき戦い』『天国までの百マイル』『SWING MAN』など出演作が続く。また、今夏公開したばかりの『ランデブー』以来になる主演作品『人間の屑』（2001年前半公開予定）も撮り終えている。新しい感覚を持った若手俳優として、現在もっとも注目されている。

女の声：林原めぐみ（はやしばらめぐみ）
3月30日、東京生まれ。日本ナレーション演技研究所の第一期特待生に選ばれ、1986年TVアニメ『めぞん一刻』の第一話で声優デビュー。以降、『らんま1/2』（早乙女らんま）、『魔神英雄伝ワタル』（忍部ヒミコ）、『それいけ!アンパンマン』（こむすびまん）、『魔法のプリンセス　ミンキーモモ[新]』（モモ）、『平成天才バカボン』（バカボン）、『スレイヤーズ』（リナ・インバース）、『新世紀エヴァンゲリオン』（綾波レイ）等、様々なアニメ作品に出演する。また、歌手としても活躍。アニメの主題歌にとどまらず、多数のオリジナルCDもリリースし人気を博している。

男の声：松尾スズキ（まつおすずき）
1962年生まれ。1988年に劇団「大人計画」を旗揚げ後、ほとんどの公演の作・演出・出演をこなす。2000年は、6月にシアターコクーンで上映されたミュージカル「キレイ」の作・演出・出演、野田地図番外公演「農業少女」の出演と舞台を中心に活動しながらも、「鳩よ!」（マガジンハウス）、「BUZZ」（ロッキング・オン）に小説、「ぴあ関西版」（ぴあ）、「Quick Japan」（太田出版）他にエッセイを連載、またガイナックス制作「フリクリ」では声優としての顔を見せるなど演劇界のみならず各界から注目される存在である。著作は「この日本人に学びたい」（ロッキング・オン）、「第三の役立たず」（情報センター出版局）、「大人失格」（光文社文庫）、「キレイ」（白水社）他多数。

彼女の母親：大竹しのぶ（おおたけしのぶ）
1975年映画『青春の門～筑豊篇』でデビュー。同年NHK朝の連続テレビ小説『水色の時』に主演、全国的に知られる。以後、実力派女優として映画（『学校 III』『生きたい』『黒い家』ほか）、舞台（『パンドラの鐘』『奇跡の人』ほか）、テレビで常に第一線で活躍。その演技力には定評がありこれまで数々の賞を受賞、映画『鉄道員（ぽっぽや）』では第23回日本アカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞している。最近ではNHK朝の連続テレビ小説『オードリー』、CXドラマ『編集王』、映画『天国までの百マイル』（2000年秋公開）に出演するなど精力的な活動を続けている。

SHIKI-JITSU
directed by hideaki anno

スタッフ・プロフィール

音楽：加古隆（かこたかし）
1947年、大阪府生まれ。作曲家、ピアニスト。東京芸術大学・大学院作曲研究室修了後、フランス政府給費留学生として渡仏。パリ国立音楽院で現代音楽の巨匠メシアンに師事、'76年作曲賞を得て卒業。在学中の'73年にパリでデビュー。自作品によるコンサートは、現在までに26カ国約200都市に及ぶ。帰国後は作曲及び演奏に、クラシック、現代音楽、ジャズの要素を包含した独自のスタイルを確立した。代表作品に、ピアノ組曲「クレー」、「箏とオーケストラのための協奏曲」、音楽詩劇『賢治から聴こえる音楽』、NHKスペシャル『映像の世紀』等がある。'98年モントリオール世界映画祭のグランプリ作品「The Quarry」（邦題『月の虹』2000年12月公開）の作曲で最優秀芸術貢献賞を受賞。

撮影監督：長田勇市（ながたゆういち）
1950年6月2日、沖縄県生まれ。高橋伴明監督（'82年『TATTOO〈刺青〉あり』）や林海象監督（'86年『夢みるように眠りたい』、'89年『二十世紀少年読本』、'93年『我が人生最悪の時』、'94年『遥かなる時代の階段を』）、周防正行監督（'84年『変態家族兄貴の嫁さん』、'89年『ファンシイダンス』）等の作品に参加。'97年、アニメ『新世紀エヴァンゲリオン劇場版 Air／まごころを、君に』に挿入された実写映像部分の撮影で庵野監督と接点を持つ。'98年、磯村一路監督の『がんばっていきまっしょい』にて、横浜映画祭撮影監督賞受賞。今回の『式日』ではスチール・カメラマンも担当している。

照明：長田達也（おさだたつや）
1952年3月25日、山梨県生まれ。'71年より、フリー助手として、映画、TV、CMの制作に参加。'83年、森崎東監督の『生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言』で照明技師としてデビューする。以降、『ロケーション』（'84年）、『夢みるように眠りたい』（'86年）、『二十世紀少年読本』（'89年）、『ファンシイダンス』（'89年）、『シコふんじゃった。』（'92年）、『Shall we ダンス?』（'96年）等の作品に参加している。

録音：橋本泰夫（はしもとやすお）
1944年8月27日、宮崎県生まれ。'65年、東京写真大学（現・東京工芸大学）卒業後、'67年、録音集団「櫂の会」に参加。熊井啓監督の『お吟さま』（'79年）を始め、『の・ようなもの』（'81年）、『南極物語』（'83年）、『植村直巳物語』（'86年）、『敦煌』（'88年）、『風の又三郎 ガラスのマント』（'89年）、『あ・うん』（'89年）、『東京兄妹』（'95年）、『大阪物語』（'99年）等に参加。'95年からの平成『ガメラ』三部作も手がけている。

録音：清水和法（しみずかずのり）
1958年4月3日、広島県生まれ。横浜放送映画専門学院4期生。'81年、今村昌平監督の『ええじゃないか』でサード録音助手として仕事を始める。以降、市川崑監督の『ビルマの竪琴』（'85年）、岡本喜八監督の『大誘拐 Rainbow Kids』（'91年）、新藤兼人監督の『午後の遺言状』（'95年）、庵野秀明監督の『ラブ&ポップ』（'98年）等の作品に参加。

編集：上野聡一（うえのそういち）
1969年2月13日、広島県生まれ。'93年より、編集助手として谷口登司夫、阿部浩英に師事し、'99年、青山真治監督の『EMBALMING』にて技師デビュー。以降、堤幸彦監督と出会い、『ケイゾク／映画』や新作『CHINESE DINNER』を手掛ける。

美術：林田裕至（はやしだゆうじ）
1961年5月20日、兵庫県生まれ。東京芸術大学油画科卒業後、石井聰互監督の『爆裂都市 BURST CITY』（'82年）の美術製作で映画界に携わる。'86年には六月劇場の『処女のはらわた』を手がけ、『ロビンソンの庭』（'87年）、『死霊の罠』（'88年）などを経て、美術デザイナーとなり、『宇宙の法則』（'90年）、『水の中の八月』（'95年）、『アトランタ・ブギ ATLANTA BOOGIE』（'96年）、『BLOOD〈狼血〉』（'99年）『うずまき』（'00年）などに参加。'90年から'98年まで劇団「維新派」の美術デザインも担当している。

衣裳：伊藤佐智子（いとうさちこ）
1973年、渋谷パルコのオープニングキャンペーン「シフォネット」を皮切りに、デザイン活動を開始。森田芳光監督の『そろばんずく』（'86年）を始めとして、林海象監督の『二十世紀少年読本』（'89年）、『ZIPANG ジパング』（'90年）、手塚眞監督の『白痴』（'99年）と、映画衣裳の分野で独特の世界を構築。自作の個展やレストランなどのアートディレクション、ブランドコスメの商品開発からプロデュースまで、その活動は多岐に及ぶ。

ヘア・メイク監督：柘植伊佐夫（つげいさお）
1960年1月27日生まれ。三宅一生、山本寛斉などのトップデザイナーのファッションショーや、写真家・篠山紀信のフォトにヘア・メイクとして参加する。'90年に第一回日本ヘア・デザイナー大賞を受賞。「VOGUE NIPPON」、「Hi FASHION」等のファッション誌やCFでもその才能をいかんなく発揮する一方、'98年より映画界にも進出。手塚眞監督の『白痴』（'99年）や塚本晋也監督の『双生児』（'99年）で異彩を放つ活躍をしている。

エンディング・テーマ曲：Cocco（こっこ）
1977年、沖縄県生まれ。'97年、ビクター／スピードスターレコードよりメジャー・デビュー。アルバム『クムイウタ』（'98年発表）、『ラプンツェル』（'00年発表）が、2作ともチャート1位を記録。大ヒットとなる。その、誰も真似ることのできないオリジナリティ溢れる音楽性——感情剥き出しの激しさと、限りなくピュアな歌の世界、そして本能のままに歌う姿——は、圧倒的な人気を誇っている。

プロデューサー：南里幸（なんりみゆき）
1962年、福岡県生まれ。高校卒業を機に上京、横浜放送映画専門学校在学中から映画製作に携わる。'95年、ラインプロデューサーとして『ガメラ 大怪獣空中決戦』に参加。'96年には『ガメラ2 レギオン襲来』を共同プロデュースする。同時期に庵野監督と出会い、'98年、庵野監督初の実写映画『ラブ&ポップ』を製作。'99年、『ガメラ3 邪神〈イリス〉覚醒』を共同プロデュースするとともに、庵野監督による『ガメラ3』製作ドキュメンタリービデオ『GAMERA 1999』もプロデュースしている。（株）シネバザール主宰。

プロデューサー：高橋望（たかはしのぞむ）
1960年10月4日、東京生まれ。'83年徳間書店入社。「テレビランド」「アニメージュ」「4WDフリーク」の編集を経て、スタジオジブリへ。鈴木敏夫プロデューサーの片腕として『おもひでぽろぽろ』（'91年）、『紅の豚』（'92年）、『平成狸合戦ぽんぽこ』（'94年）、『耳をすませば』（'95年）、『ホーホケキョとなりの山田くん』（'99年）等の制作を担当。『海がきこえる』（'93年）ではプロデュースを手掛けている。

平成12年11月25日発行

定価：1,050円（本体価格1,000円）

監修：庵野秀明
原作：藤谷文子 ©2000 Ayako Fujitani
スチール撮影：長田勇市
（表紙、P.1〜3、20〜21、40〜41、59〜61、63〜65、67〜72）
編集：徳木吉春
編集担当：筒井亮子（スタジオジブリ出版部）
デザイン：グルーヴィジョンズ
発行人：鈴木敏夫
発行：スタジオカジノ（株式会社徳間書店 スタジオジブリ事業本部）
〒184-0002 東京都小金井市梶野町1-4-25
電話 0422-60-5630
©2000 STUDIO KAJINO

印刷・製本：図書印刷株式会社

「式日」©2000 F&A・STUDIO KAJINO

原作となっています「逃避夢」は、
反対側からです。

はじめに

このお話は、私が十七歳の時に書きはじめたもので、そこからは、誰にせかされるでもなく、しかし、自らの背を押す様に、書き進めたり、止めたりをくり返しながら、十九の末の頃、やっとこさ完結したものです。

私は、学校という場においては、常に、こよなく「国語」という教科を好きでおりましたが、それと逆に、私はいわゆる「キチンとした文法」や「正しい文章とは？」なるものには、何故だか興味がわきませんでした。中学受験の時の国語のテストで出題された一問で、私の答えが間違っていた。時の解答に未だ納得していないからか？しかしながら私は、人間の心や頭から発せられる「言葉」が好きです。そのヒビキも好きで、「夢想」や「空想」、中でも「現実」というものは、恐ろしい程に興味深く、感嘆の声をあげたくなる程[illegible]でありながら、常に私の側にあります。ついでに、「妄想」なども大好きです。あの頃の私は、それらのもので構築された世界の中に住んでいた。そして、何をするでなく、何をしても、そこから抜け出せないでいた。どこかで何度も聞いたコトのある言葉を思い出した。何事も、結果が出ればよい。結局、何と言われようが、一番になりさえすればよいのだという。そんな言葉を思い出したら、嫌な気持ちにみまわれた。結果を出すことの出来ない、一番になれない自分は、どうすればいいのか。困惑して、苦しまぎれに私は、自分の頭上に張りめぐらされた言葉達を、書き記し続けることにした。ちゃんと、完結しないでなるものかと、思っていたのだろう。そうして出来た、このお話。よく言われる結果なのかというと、少し違う気がするが。これから、「逃避夢」を読み進んで下さる方。読み苦しい点、変な文章などと思われる点、多々出てくるやもしれませんが、私は、あの十七、十八、十九歳の、文子という女の子の、想いや考え、計算や、打算といった全てを、少しでもくみとるべく、まことに勝手ながら、彼女の言葉を一語、一句変えることなく、こうして本にさせていただきたいと思います。そして、それを寛大にも、読んで下さる方。すみません。

ありがとうございます。

藤谷 文子